
 原 著

中学生における生命と性に関する授業の効果

風 間 み え

新潟県立看護大学看護学部

臨床看護学領域助産学

Effects of Life and Sex Education Classes on Junior High School Students

Mie KAZAMA

Division of Midwifery Education, Niigata College of Nursing, Joetsu

要 旨

日本の10代の性行動や性意識はインターネットの普及や性情報の氾濫に伴い大きく変化しており、性行動は低年齢傾向を辿っている。教育現場では、中学生に「生命と性」に関する授業、すなわち生命教育と性の健康教育に関する授業を行なっているが、その学習効果は十分に解明されていない。そこで本研究では公立中学校の3年生205名に対して生命と性についての授業介入前後にアンケートを行い、介入効果を調査した。調査項目は、「自尊感情」、「性別の受け止め」、「男女交際をどの程度まで認めるか」、「性交のイメージ」、「性交への意識」の5項目とし、それらを授業前、授業直後、授業後2ヵ月に調べた。自尊感情に関しては、授業直後から上昇し授業後2ヵ月の時点でさらに上昇が見られた。性別の受け止めについては、女子において授業直後で有意に上昇したが授業後2ヵ月時点には上昇は有意でなかった。「男女交際の限度」、「性交のイメージ」、「性交への意識」に関しては、授業介入の効果は見られなかった。中学生への生命と性の授業介入で、自尊感情の上昇と自身の性を肯定することを実証した。

キーワード：生命と性の教育、自尊感情、性別の受け止め、中学生

Abstract

The sexual behavior and sexual awareness of Japanese teens have largely changed due to the flood of information regarding sex and the spread of the Internet, leading to a trend for earlier sexual activity. "Life and sex" classes are held at junior high schools, but the effects of this intervention are unclear. In this study, we conducted a survey of 205 9th graders of a public junior high

Reprint requests to: Mie KAZAMA
Division of Preventive Medicine,
Niigata University Graduate School of Medical
and Dental Sciences,
1-757 Asahimachi - dori, Chuo - ku,
Niigata 951 - 8510, Japan.

別刷請求先：〒951-8510 新潟市中央区旭町通1-757
新潟大学大学院医歯学総合研究科
環境予防医学分野

風 間 み え

school before and after life and sex classes (intervention), and assessed the intervention effects. Survey items included self-esteem, acceptance of gender, extent of acknowledgement of male-female relations, impression of sexual intercourse, and awareness of sexual intercourse. Changes in these items were assessed before and after the intervention, and two months later. Feelings of self-esteem significantly increased after the intervention, and increased even further two months later. With respect to the acceptance of gender, a significant increase was observed among females immediately after the intervention, but it was not two months later. For the remaining items, no changes were observed. These results suggest the need to implement life and sex classes to increase self-esteem and acceptance of gender in junior high school students.

Key words: life and sex education, self-esteem, perceived gender, junior high school students

はじめに

思春期は、親からの心理的自立と、アイデンティティーを確立するという二つの発達課題を達成することで大人として社会参加が可能になる時期である。同時に性に関するアイデンティティーを発達させる時期でもあり、性アイデンティティーを確立する前段階として異性への関心・興味が出現してくる。ある調査によると小学校4年生では、女子で78.8%、男子で60.1%が異性に興味があると答えており、低年齢のうちに異性に興味や関心を抱いている者が増加してきている¹⁾。また、性交経験者は、中学生女子で4.2%、男子で3.6%であり、高校生女子では30.0%、男子では26.6%となり、中学生から高校生にかけて経験者の急激な増加が見られる²⁾。性交を行なった理由については、「好きだったから」が6割から7割を占め、次いで「経験してみたかったから」との回答が見られた²⁾。このことから、思春期の子どもたちは感情や興味で性行動³⁾に走っていると思われる。

近年、思春期の子どもたちでも簡単に性の情報入手することが出来るようになり、思春期の早い時期で性に関心や興味を持ち始めると考えられる。特に携帯電話により異性との親密性が増すこと、また携帯電話の所有が早期化していることを高橋は指摘している²⁾。また、望まない時期の妊娠や性感染症が増加していることは社会的な問題であり、これらは性行動のコントロールや性行動から起こる危険の認識、避妊や性感染症に関する知識を得る機会の必要性を示唆している。その対

策として、学習指導要領(保健分野)は、「思春期の生殖にかかわる機能の成熟から妊娠、および異性の尊重や性情報への対処など性に関する適切な態度や行動の選択が必要となることを3年間で理解する」ことを盛り込んでいる⁴⁾。現在、小学校や中学校では「生命と性」の教育が学校単位で取り組まれており、保健体育、家庭、社会の各教科と道徳、総合的な学習の時間並びに特別活動⁵⁾で授業が行なわれている。限られた時間の中で生徒に性教育を行うことは重要であるが、時間的スケジュールの観点から性教育の効果的な進め方を明らかにした研究は少ない。いくつかの先行研究では介入授業の効果を授業前後で比較しており、一定の効果は報告されている⁶⁾。しかし、授業後ある期間をおいてその効果を調べた研究はほとんどない。本研究の目的は、生命と性の介入授業の効果について、授業直後と2ヵ月後の効果を明らかにすることである。本研究では自尊感情をアウトカムとして設定した。性に関する科学的情報や予防スキルを学んで実際の行動に生かすには、自分自身および他者を大切にすることが必要であり、それは自尊感情が高まることにより可能になる⁷⁾と考えられるからである。

対象と方法

1. 対象者と調査期間

本研究は、新潟県内の公立中学校2校の3年生205名を対象とした。授業介入およびアンケート調査は2009年7月から2009年10月に行われた。

2. 調査方法

介入授業は生命の教育と性教育の2つの授業より構成されている。授業内容と用いた教材は表1に示すとおりである。この介入授業の特徴は、視覚教材に加えて胎児・新生児モデルを具体的な教材として用い、生命誕生、第二性徴、生殖のしくみ、性衝動について科学的根拠に基づいて教授することであった。アンケート調査は無記名の自記式質問用紙を用いて行われた。アンケート調査を行った時点は、授業2週間前、授業直後、授業後2ヵ月の3回であり、同じ内容の質問用紙を用いて調査した。アンケート質問用紙を205名に配布し、3回とも全員から質問用紙を回収できた。そのうち、欠損のある回答を除いた有効回答数は196名(96.6%)であった。その内訳は男子103名、女子93名であった。

アウトカムとしての調査項目は、「自尊感情」、「性別の受け止め」、「中学生としての男女交際の限度」、「性交のイメージ」、「性交への意識」の5項目とした。生命の教育は、性教育として重要なだけでなく、「自尊感情」や「性別の受け止め」に対してもよい影響を与えられ、生命の教育において、生命が生まれる仕組みとそれぞれの性の役割を科学の視点から理解させることは、自分自身や自身の性の価値の重要性を認識すると考えられるからである⁸⁾。

本研究への参加は自由意志であることを、参加しない場合もなんら不利益を被らないことを対象者

に伝えた。対象者の保護者には、あらかじめアンケートおよびその項目を説明し、アンケート結果についても学年便りにより説明を行なった。アンケート用紙の回収方法に関しては、アンケートの回答内容が見えないように折りたたんで個別の封筒に入れ封をし、回収箱を設置して生徒の自由意志で提出してもらった。本研究はヘルシンキ宣言を遵守して計画され、研究の倫理面については放送大学で審査され許可を受けた。

3. 調査項目

1) 自尊感情

自尊感情については、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度10項目日本語版を使用した⁹⁾。選択肢は「あてはまらない」「ややあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」の4段階として、それぞれ4点～1点(合計点数10点から40点)を付与した。自尊感情が高いほど合計点数は高くなる。

2) 性別の受け止め

自身の性別について「今の性別でよかったと思う」か「今の性別でよいと思わない(または、よくわからない)」か、を上田の設定した項目⁶⁾と同様に尋ねた。前者は自身の性別を肯定しており、後者は肯定していない、と判断した。

3) 中学生としての男女交際の限度

中学生の男女交際の限度として性交を認めるかについて上田の設定した項目⁶⁾と同様に尋ねた。

表1 生命と性の健康教育

	授業項目	内容	教材
生命教育 (70分)	生命創造 生命を繋ぐ 人形抱っこ体験	自分の誕生・生命の尊さを学ぶ 祖先からの生命のつながりに ついて知る 胎児の成長:赤ちゃんとは何か を学ぶ	VTR パワーポイント講義 胎児人形・新生児人形
性の健康教育 (50分)	思春期・第二性徴 性の健康・性交で起こること	男女の身体的変化を知る 個人差を理解する 生殖の仕組みを学ぶ 性衝動と性行動について理解 する 男女の生理的・心理的な違いを 理解する	パワーポイント講義 パワーポイント講義

4) 性交のイメージ

性交のイメージについては、上田が考案した尺度⁶⁾を参考に、「性交によりお互いの愛が深まる」、「性交はよくないことだ・怖い」、「愛情に関係なく性交してもよい」の3項目を尋ねた。

5) 性交への意識

東京都性教育研究会実施の調査項目¹⁾を使用し「性交は結婚する時まで待つ」、「好きな相手とできた時は性交してもよいと思う」、「性交をするか否かはわからない」の3項目を尋ねた。

4. 統計手法

自尊感情に関しては、介入授業前のスコアと介入授業直後および2ヵ月後のスコアを対応のないt検定で比較した。この場合、2回の比較を行うので、P値をボンフェローニ法で補正した。その他の項目、すなわち、①性別の受け止め、②男女交際の限度、③性交のイメージ、④性交への意識、に関しては、それぞれ、①自身の性別を肯定する

者の割合、②性交を容認する者の割合、③「性交によりお互いの愛が深まる」と回答する者の割合、④「好きな相手とできた時は性交してもよいと思う」と回答する者の割合を指標として、介入授業前と介入授業直後および2ヵ月後をカイ二乗検定で比較した。この検定の際にもP値をボンフェローニ法で補正した。なお、本研究では3回のアンケートを連結可能とするデザインに対して学校側の同意を得られなかったため、統計解析では対応のない検討を行った。P<0.05を有意差ありの基準とした。

結 果

対象者の介入授業前のアンケート結果を表2に示した。自尊感情スコアに有意な性差は見られなかった。「性別の受け止め」(P<0.001)、「中学生としての男女交際の限度」(P<0.001)、「性交のイメージ」(P<0.01)、「性交への意識」(P<0.01)

表2 介入授業前のアンケートの基礎集計

	男性 (n=103)	女性 (n=93)
自尊感情スコア	平均値 24.5 (SD 4.9)	平均値 23.5 (SD 4.7)
自身の性別の受け止め*		
よかったと思う	91 (88.3%)	63 (67.7%)
よかったと思わない	12 (11.7%)	30 (32.3%)
中学生としての男女交際の限度*		
性交をしてよい	21 (20.4%)	5 (5.4%)
それ以外	82 (79.6%)	88 (94.6%)
性交のイメージ*		
お互いの愛が深まる	67 (65.0%)	47 (50.5%)
愛情に関係なく性交してもよい	7 (6.8%)	1 (1.1%)
性交はよくないことだ・怖い	29 (28.2%)	45 (48.4%)
性交への意識*		
性交は結婚する時まで待つ	14 (13.6%)	11 (11.8%)
好きな相手と性交してもよい	34 (33.0%)	11 (11.8%)
性交をするか否かについてはわからない	55 (53.4%)	71 (76.3%)

*カイ二乗検定により有意な性差あり

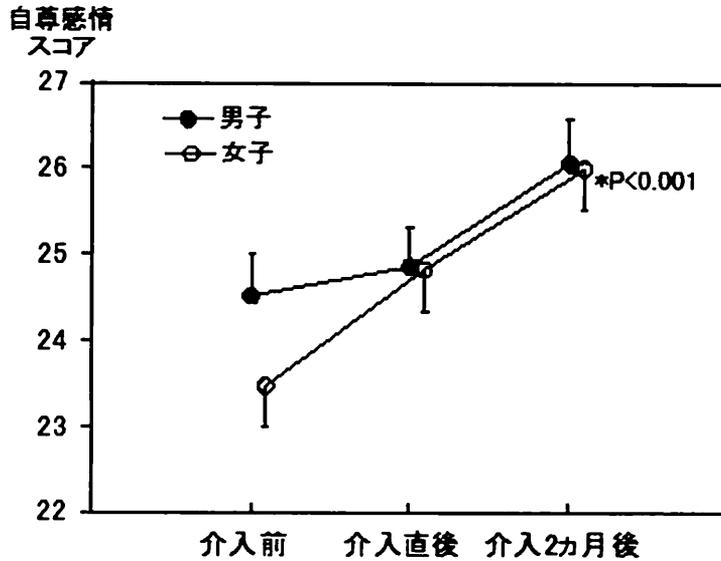


図1 自尊感情の変化 (バーは標準誤差)

男女共、介入授業後にスコアは上昇する傾向であった。女子において、介入授業前と比較し介入授業後2ヵ月のスコアの上昇は統計的に有意であった (P < 0.001)。

表3 介入授業による自身の性別の受け止め、実際の限度、性交のイメージ、および性交への意識の変化

		介入前	介入直後	介入2ヵ月後
自身の性別の受け止め				
自身の性でよかったと	男性 (n=103)	91 (88.3%)	87 (84.5%)	89 (86.4%)
思う者の割合	女性 (n=93)	63 (67.7%)	78 (83.9%)*	69 (74.2%)
男女交際の限度				
性交をしてよいとする者の割合	男性 (n=103)	21 (20.4%)	21 (20.4%)	23 (22.3%)
	女性 (n=93)	5 (5.4%)	5 (5.4%)	1 (1.1%)
性交のイメージ				
性交はお互いの愛が深まる	男性 (n=103)	67 (65.0%)	70 (68.0%)	53 (51.5%)
とする者の割合	女性 (n=93)	47 (50.5%)	49 (52.7%)	40 (43.0%)
性交への意識				
好きな相手と性交してもよい	男性 (n=103)	34 (33.0%)	36 (35.0%)	28 (27.2%)
とする者の割合	女性 (n=93)	11 (11.8%)	11 (11.8%)	7 (7.5%)

*介入前と比較し有意差あり (P=0.020)

については、全て有意な性差が見られた。

自尊感情スコアの変化を図1に示した。男女共に介入授業後にスコアは上昇していた。男子では、

介入授業前と比較し介入授業後2ヵ月のスコアは上昇傾向であった (P = 0.059)。女子では、介入授業前と比較し介入授業直後のスコアは上昇傾向

($P = 0.098$)であり、介入授業後2ヵ月のスコアの上昇は統計的に有意であった ($P < 0.001$)。

「自身の性別の受け止め」、「中学生としての男女交際の限度」、「性交のイメージ」、「性交への意識」の変化を表3に示した。自身の性別の受け止めに関して、女子では介入授業直後に自身の性別を肯定する者の割合は増加した ($P = 0.020$)。その他の項目では、介入授業により割合の有意な変化は見られなかった。

考 察

思春期における性的成熟の訪れは、自分の身体を強く意識すると同時に身体への関心が高まり、自我意識と合わせて自己への関心を強めていく。自己への関心から、自分自身を価値あるものとして肯定的に見たいと望むものであり、自尊感情が高い状態においては、社会における自分自身の位置をとらえて自分も能力を発揮することができるのではないかと考える。

本研究の介入授業により自尊感情の上昇が見られ、特に女性で顕著であった。梶田¹⁰⁾は、自尊感情の形成に性差があると指摘しており、男子は自らの基準に照らして自己を評価しつつ自尊感情を形成していくことが強いのにに対し、女子は他者から評価され受容される過程を通して自らの自尊感情を形成すると述べている。この介入授業では、思春期の身体的変化と生命をつなぐことの意味と身体変化の必要性に重点をおき、さらに女子は妊娠という過程で自分の体の中で生命を育み産み出す機能を持つことに関してVTRを用いて視覚的に理解できるような構成になっているため、これらが自尊感情を高める要因であったのかもしれない。特に女性は、妊娠出産を受容することで自尊感情が上昇した可能性が考えられる。自尊感情の上昇が起きたことは、生殖に寄与する行動時期の選択や性感染症予防など、今後の性に関する予防行動につながるものと考えられる。

性別の受け止めに関しては、介入授業後女子において自身の性を肯定する傾向が見られた。性的成熟の発現に対する受け止めについては、男子で

は無反応や当然の発達としてとらえている者が多いが、女子では月経や乳房変化について無反応と同時に否定する感情がありアンビバレントな受け止めをしていると落合ら¹¹⁾は述べている。

本研究では授業の内容を、思春期の男女の身体的変化を生命誕生の必要性和関連させた内容として行なった。そのため、男子の精通や性毛発現および、女子の初潮や乳房の変化、性毛発現に対して思春期の身体変化の必要性や重要性を理解することにつながり、女子で自身の性別に満足している人の割合の増加につながった可能性がある。しかしながら、その割合は、授業後2ヵ月時点でやや低下していたことから、効果の継続は困難であるかもしれない。

介入授業による中学生としての男女交際の限度、性交のイメージ、性交への意識の3項目に変化はみられなかった。三井善止¹²⁾は学校教育における生と性の教育は学校全体での教育場面をとおしてあらゆる場面で実施されるものと述べているように長い時間をかけて教育していくことが必要と考える。

本研究では、3回のアンケートデータを個人間で連結することができなかつたため、対応のあるt検定を行うことができず対応のないt検定を行った。対応のないt検定は、対応のあるt検定に比して統計的なパワーが劣るため、今回の統計解析では見出せるはずの有意な差を検出できなかった可能性がある。この点は本研究の限界であると言える。

ま と め

生命と性の授業介入により、自尊感情の上昇と自身の性の肯定(女子のみ)を実証した。しかしながら、性別の受け止めに関しては、授業直後に起こった変化が授業後2ヵ月のまで継続できなかった。今後は生命と性の授業効果の長期的な継続性を調べる必要がある。

謝 辞

本研究に協力していただいた中学生の皆さんと、調査

項目の検討や調査用紙の配布と回収を引き受けて頂きました校長先生をはじめ諸先生方に厚く御礼申し上げます。また、本研究の統計解析にご助言を頂きました中村和利先生（新潟大学大学院医歯学総合研究科環境予防医学分野）に感謝申し上げます。

文 献

- 1) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会：児童・生徒の性. 学校図書, 8-39, 2005.
- 2) 日本性教育協会編：若者の性白書 第6回青少年の性行動全国調査報告. 小学館, 7-119, 2005.
- 3) 新藤幸恵, 中野仁雄, 遠藤俊子：母性看護学概論 ウイメンズヘルスと看護. 69-82, 2013. メジカルフレンド社
- 4) 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編. 146-149, 2008.
- 5) 文部科学省：中学校学習指導要領解説総則. 41, 2008.
- 6) 上田那枝：思春期における性心理構造の分析. 平成16年度 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター実践研究成果報告書, 2006.
- 7) 高田千恵子：教育と医学, 慶応義塾大学出版会, 632: 37-43, 2006.
- 8) 上田那枝：中学生が抱く「性のイメージ」分析—生命と性の健康教育に向けて. 昭和大学保健医療学雑誌, 12: 54-62, 2014.
- 9) 堀 洋道監修, 山本真理子編：心理測定尺度集 1人間の内面を探る“自己個人内過程”. サイエンス社, 29-31, 2001.
- 10) 梶田淑一：自己意識の心理学. 東京大学出版会, 94-119, 1980.
- 11) 落合良行, 伊藤裕子, 齋藤誠一：ベーシック現代心理学 青年の心理学 (改訂版). 有斐閣, 51-70, 2002.
- 12) 三井善止：新 生と性の心理学. 玉川大学出版部, 115-142, 2005.

(平成27年6月12日受付)